

新倉の歴史－富士山遥拝と新田開発の町－

展示目録

会期：令和7（2025）年10月18日～令和8（2026）年1月19日

富士山の麓の町である新倉地区は、南向きの斜面地が広がり日照時間が長く、湧水や沢水があるだけでなく、往古は湖も広がるなど水に恵まれた地であったことから、約1万年前から人々が暮らし始めました。江戸時代になると新倉の人々は周辺の溶岩台地の開発を積極的に行います。そして、山を隔てた向こうにある河口湖から水を引いて水田を広げるため、約4kmという全国屈指の長さを誇る用水トンネル「新倉掘抜」を完成させます。また、富士山の眺望に優れていることから、富士山の遥拝地に新倉富士浅間神社を祀り、富士山の鎮火を祈願してきた歴史があります。

本展では、新倉に伝来してきた古文書・絵図・写真を通して、新倉の歴史を紹介します。

1 新倉のはじまり－縄文時代－

新倉は、富士吉田市内で最も遺跡が集中する地域であり、縄文時代から平安時代の遺跡が12箇所あります。このうち縄文時代（15,000～2,400年前）の遺跡が9箇所あり、新倉の池之元遺跡から発見された市内最古の竪穴住居跡からは約11,500～10,500年前の縄文土器が発見されています。

新倉は北と東西を 嘯山・阿の山・新倉山に囲まれますが、南に平地が広がる地形であり、市内の他地域に比べて、日照条件が良い地域です。また、山すそには水源地も多くあり、池之元遺跡（現、旭町）には、「コミゾ」という湧水があり、その約1km東に広がる小扇状地（現、浅間町）には入山川が流れ、湧水も豊富にあることから、多くの遺跡が分布します。

新倉の南に広がる平地は、富士山から流下した溶岩や土石流により形成されたものです。縄文時代以降に新倉地内を流れた溶岩には、約9,000年前の縄文時代に流下した桂溶岩と約1,000年前の平安時代に流下した剣丸尾第1溶岩があります。これらの溶岩が流下した後、コミゾや入山川などの水が出口を失い、新倉の山すそを囲むように堰止湖が形成されていたと推定されています。そのため、新倉は川だけでなく湖もある水に恵まれた地域であったと考えられています。

昭和44（1969）年に開通した中央自動車道で削られた小舟山の北にあったと伝わる小舟湖もこうした堰止湖の1つだったのかもしれません。



池之元遺跡の縄文土器
縄文時代
館蔵



池之元遺跡の縄文土器
縄文時代
館蔵



池之元遺跡の道具
縄文時代
館蔵



上空から望む新倉地区
写真
昭和 30（1955 ～ 65）年代
館蔵

2 新倉のはじまりー弥生時代～平安時代

新倉は、弥生時代(約 2,500 年前～ 1,700 年前)の遺跡は 2 か所(西沢遺跡・池之元遺跡)、古墳時代(1,700 ～ 1,400 年前)の遺跡は 1 か所(池之元遺跡)しかありませんが、平安時代の 9 ～ 10 世紀ころ(約 800 ～ 1,000 年前)になると 5 か所(西沢遺跡・入り遺跡・西山道遺跡・池之元遺跡・出口遺跡)に増えます。弥生時代～平安時代の遺跡は、縄文時代と同じく山すそに位置しますが、出口遺跡だけは 10 世紀後半～ 11 世紀前半に流下したとされる剣丸尾第 1 溶岩の下から当時の器(土師器)が発見されています。隣接する下吉田地区からも出口遺跡と同様に剣丸尾第 1 溶岩で埋没した遺跡(西丸尾遺跡・御姫坂遺跡・下吉田新屋敷遺跡)が多数見つかったことから、9 ～ 10 世紀にかけて居住地が山すそから平地へと広がりがつあったことが分かります。しかし、剣丸尾第 1 溶岩が流下したことで、開発し始めていた平地上の集落は溶岩下に埋没し、土と水が失われた溶岩台地に居住することは困難であったため、鎌倉時代の 12 世紀以降も縄文時代～平安時代と同様に山すそや入山川の小扇状地を集落の中心地とし、少しずつ溶岩台地の開発を進めていったと考えられます。なお、剣丸尾第 1 溶岩の東縁や西縁に沿って、富士山の雪崩をきっかけに発生する雪代(土石流)が流下するようになりますが、この雪代がもたらす土砂が剣丸尾第 1 溶岩を覆っていったため、年月が経つにつれて溶岩台地の開発もしやすくなっていきました。



池之元遺跡の土師器
古墳時代
館蔵



池之元遺跡の土師器と鉄製品
平安時代
館蔵

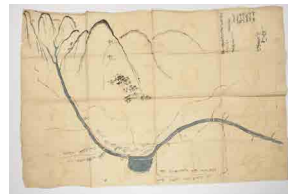
3 新倉の湧水

新倉は、10 世紀後半～11 世紀前半に富士山から流下した剣丸尾第 1 溶岩により平地の大半を覆われたため、溶岩に覆われていない山すそや小扇状地を居住地としてきました。鎌倉時代以降、新倉の人々が村の中心としてきたのが、入山川が形成した小扇状地でした。これは現在の浅間町^{あさまちやう}の範囲であり、昭和 26（1951）年に浅間町と改称するまでは「古屋」と呼ばれてきました。人々の生活を支えてきたのが浅間町を潤す豊富な水であり、主な水源として入山川・浅間町内から湧き出る湧水・大正寺前の湧水「ツツミ」がありました。その他に現在の旭町の湧水「コミゾ」もありましたが、大半を剣丸尾第 1 溶岩で覆われた同地の開発は 18 世紀までほとんど行われませんでした。

入山川の上流には、大棚の滝、小棚の滝があり、その中間には獅子岩という岩があります。昔、新倉の人々は日照り続きで困った時に、大棚の滝の滝つぼを掘り広げて滝つぼを大きくし、ヒノキの枝を切ってきて、竜の形に長く編んで作り、滝の上から水にのせて滝つぼに流し落とし、雨乞いの祈願をしたと伝わります。同じことが江戸時代の地誌『甲斐国志』（1814 年成立）にも「早魃^{かんぼつ}ノ年ハ土人、此ノ滝ノ下ヲ浚^{さら}ヘバ忽チ雨フルト云フ」と記されていることから、新倉の人々にとって入山川が欠かせない水源地であったことが分かります。また、雨が極端に少なくなった時に、入山川や他の湧水の水量が減る恐れがある中で、新たな水源を求め続けてきたと考えられます。



新倉村の絵図
「新倉村絵図」
18 世紀
館保管



新倉村の絵図
「新倉村絵図」
享和元（1801）年
館保管

4 新倉と河口・浅川^{あざがわ}

新倉と河口湖東岸の河口と浅川（現、富士河口湖町）は、三ツ峠山から南西に向かって延びる標高 1,100～1,300 m の山^{うそぶき}（嘯山・霜山など）をはさんで隣接します。そのため、山を越えて行き来する道があり、昭和時代初めまでは地図にも明記されており、盛んに利用されていたようです。

江戸時代の記録によれば、新倉村の人々は嘯山で下草や柴を採取し、富士山の裾野で萱や薪を刈っていました。ただ、それだけでは足りないため、北東の上暮地村とともに山を越えた先の川口山に入って薪と秣^{まぐさ}（畑の肥料や馬のエサにする草）を採取していました。川口山はその名の通り、川口村（現在の河口）の東に広がる山ですが、山の草木を川口村と新倉村・上暮地村の 3 か村が利用する入会地となっていたのです。このことから、新倉村と上暮地村と川口村の人々が山を越えて盛んに行き来をしていたことが分かります。また、浅川の人々は、新倉の浄土真宗寺院の如来寺の檀家が多く、地区内の阿弥陀堂の法要は如来寺の住職が執り行っています。なお、この阿弥陀堂は、浄土真宗開祖の親鸞上人が京都に帰るときに、新倉から山を越えて着いた浅川の宿泊先であった外川弥兵衛が弟子となり、建てたものと伝わります。新倉から浅川までの距離は、嘯山を北に迂回しても山越えでもそれぞれ約 5km ほどしか離れていないこともあり、新倉と河口・浅川の人々は山の利用などを通じて、濃密な関係を築いてきたと考えられます。



新倉村と川口山
「新倉村絵図」
天保9（1838）年
館保管



川口村と川口山
「川口村絵図」
明治13（1880）年
館保管

5 新倉と荒蔵一室町時代（16世紀）

新倉という地名の初出は16世紀の文献ですが、表記は「荒蔵」でした。当時、新倉や吉田（現在の^い上吉田と^か下吉田）は、甲斐国大名の武田氏と郡内（都留郡）領主の小山田氏が支配していましたが、相模国大名の北条氏や駿河国大名の今川氏に度々攻め込まれていました。永正13（1516）年12月には駿河国の今川氏親に攻め込まれ、新倉の南東約3kmに位置する上吉田の城山を奪い取られてしまいます。この合戦に参加していたのが、河口湖南岸の船津に屋敷を構えていた小山田氏の家老小林尾張守でした。そして、翌年の正月、小林尾張守は新倉に出陣し、今川勢に向かって一気に攻めかけ、10日間で城山を取り戻しています。この合戦において、船津を拠点とした小林尾張守が新倉に出陣していることから、船津と新倉が深く結びついていたことが分かります。なお、小林尾張守は、新倉に隣接する下吉田にも進出し、16世紀中頃に現在の弁天町に屋敷を構えたと伝わります。また、新倉の浄土真宗寺院正福寺の記録によれば、城山城主は遠山和泉守長房であり、長男の遠山伊豆守重正（没年：16世紀初め）が正福寺住職となり、乗金（乗欽）の名を浄土真宗中興の祖の蓮如上人から賜ったとあります。同じく新倉の浄土真宗寺院大正寺の記録によれば、城山を拠点とした遠山伊豆守重正が蓮如上人に皈依し、新念寺（大正寺）を開いたとあります。これらの記録から、城山が上吉田だけでなく新倉や船津を守る拠点になっていたと考えられます。



新倉（荒蔵）と城山
「年並記」
江戸時代
館保管



正福寺と城山
「新倉山正福寺由緒書」
慶応4（1868）年
正福寺蔵

6 浅間町と新倉山・小舟山

縄文時代から平安時代の約11,500～1,000年前まで、人々は新倉の山すそや入山川の小扇状地に居住してきましたが、900年前（12世紀）以降、入山川の小扇状地に大きな集落が形成されていったと考えられます。これが、現在の浅間町の始まりであり、新倉で最も歴史ある地区のため「古屋」と呼ばれてき

ました〔昭和 26（1951）年に浅間町に改称〕。

浅間町に多くの人が住むようになったのは、入山川という水源があるだけでなく、浅間町内に複数の湧水（大正寺前の湧水「ツツミ」・浅間神社入口西のグンダリ坂の湧水・小舟橋近くの湧水）があり、飲用水など生活に必要な水が得やすかったためです。大正寺の前には南北 280m、東西 80m ほどの小山「小舟山」が、昭和 44（1969）年に完成した中央高速道路の工事で削られるまでありました。山の名前は、山の形が小舟に似ていることに由来すると考えられますが、小舟山の北側にツツミなどの湧水が流れ込む大きな池があり、水に浮かぶ舟のように見えたのかもしれません。また、伝承ではこの池を「小舟湖」と称したとあります。浅間町の東には新倉山があり、新倉地区の氏神である新倉富士浅間神社が鎮座します。由緒によれば、9 世紀に富士山が大噴火した時に、朝廷から勅使が参向し勅使面をかぶって舞を奉納し、富士山を鎮火させたと伝わります。新倉富士浅間神社は富士山の姿を一望できる地にあり、富士山を御神体として拝む遥拝信仰の地であったと考えられます。



新倉山と小舟山
「新倉村絵図」
18 ～ 19 世紀
館保管



浅間町の地割と湧水
「瑞穂村之内新倉組壹番字古屋敷全図」
明治時代
館蔵



新倉富士浅間神社の大鳥居から望む小舟山と富士山
写真
昭和 27（1952）年
館蔵



新倉山から望む小舟山と富士山
写真
昭和 20 年代後半～ 30（1950～ 65）年代／館蔵

7 新倉富士浅間神社と火祭

新倉富士浅間神社は、新倉山・小舟山との深い関わりを示す次のような由緒が伝わります。本殿の隣に鎮座する荒浜神社はゴインキョサマといい、小舟山の北側が小舟湖だったときにそのほとりに祀られていました。後に新倉山の中腹に祀ったので中尾神社と称するようになり、現在の新倉富士浅間神社になったとされます。また、浅間神社または鳥居の土台石は新倉山から崩れた石とされ、御神体は入山川の川べりにあったホタル石と伝わります。

新倉富士浅間神社は、富士山の登山口の上吉田に鎮座する北口本宮富士浅間神社の吉田の火祭とも深い関係がありました。現在、吉田の火祭は北口本宮富士浅間神社の祭礼として 8 月 26、27 日に執り行われる富士山の山じまいの祭として知られますが、江戸時代までは、北口本宮富士浅間神社の西に鎮座する諏訪神社の祭礼として旧暦 7 月 21、22 日に執り行われてきました。この 2 日間、諏訪神社の神輿である明神神輿と富士山形の御山神輿の 2 基が渡御しますが、現在と大きく異なるのは、江戸時代までは御山神輿に新倉の人々が深く関わってきたことです。18 世紀前半の記録によれば、新倉の人々が作った富士山形の神輿を自分たちで担ぎ、火祭に参加したとあります。18 世紀中頃になると神輿の参加はなくなり、神輿に載せる雪綿のみを届けるようになります。そして、明治時代以降、雪綿を届けることも行われなくなりました。



火祭と新倉の富士山型神輿
「甲斐国都留郡新倉村高反別
指出明細帳」
享保 15（1730）年
館保管

8 新倉の田畑と出作－江戸時代（17 世紀）－

富士吉田市内は冷涼な気候のため、江戸時代、標高 800m 以上に位置する上吉田村・^{あらや}新屋村・松山村には水田がなく、標高 650～800m に位置する新倉村・下吉田村・^{おおあすみ}大明見村・^{こあすみ}小明見村・^{かみくれち}上暮地村に水田がありました。新倉村以外は、水田が 6～34 町歩（1 町歩：約 1 ヘクタール）と、冬に凍らないように水を流して育てる^{みずかけむぎ}水掛麦の畑が 4～33 町歩ありましたが、新倉村は水田が 2 町歩で水掛麦畑はありませんでした。なお、普通畑は約 31 町歩ありました。このように水田や水掛麦畑が少ないのは、居住地である浅間町（古屋）を除けば水源がほとんどなかったためです。新倉の人々はこれを補うために、隣接する下吉田村・大明見村・船津村（富士河口湖町船津）の未開拓の土地を田畑にする新田開発を進め、寛文 9（1669）年には、水田 5 町歩と水掛麦畑 0.6 町歩を他村内に所持していました。これらの出作地は、元々田畑を作るのが困難で他村でも手つかずだっただけでなく、新倉村から 1～3 km も離れているなど、苦勞が絶えない場所でした。また、本来であれば出作地は所在する村に所属し、その村で年貢を負担することになりますが、新倉村では出作地を村の所有地として認めてもらい、年貢を負担してきました。明治時代以降、江戸時代の村が合併していき、現在の富士吉田市となっても、その歴史は土地に刻まれており、新倉地番の土地が船津に大きく入り込んでいたり、新倉の小字が下吉田地内に残っていたりします。



新倉村の水源地と出作地
「新倉村絵図」
明和 9（1772）年
館保管



新倉村の出作地と年貢
「甲斐都留郡新倉村高反別明
細帳」
天保 12（1841）年
館保管



地図にみる新倉村の出作地
「南都留郡瑞穂村勢要覧」
大正 11（1922）年
館保管

9 新田・上新田と溶岩台地—江戸時代（17～18世紀）—

新倉の人々は、文禄3（1594）年から寛文（1669）9年までの75年間で村内や出作地の新田開発を進め、石高を147石から247石と100石も増やしました。当時の村は古屋（浅間町）のみでしたが、田畑が広がり人口も増えたため、手つかずだった剣丸尾第1溶岩の台地上に新たな屋敷地と田畑を造る新田開発をしていきます。まず、貞享3（1686）年ころに新田（下宿〔現、新町〕）を開発します。そして、大正寺前の湧水「ツツミ」から用水路を延ばし、飲み水などの生活用水としました。続いて正徳2（1712）年または享保15（1730）年ころに上新田（旭町）を開発します。上新田は、同時期に開発された下吉田の下新田に対して上（南）に位置する新田という意味です。開発のきっかけは、享保13（1728）年の山崩れで古屋の家屋に被害が出たためと伝わります。水源は、湧水「コミゾ」ですが、上新田までは560間（約1km）もの木製の樋で導水したため、「樋新田」と呼ばれました。新倉の浄土真宗寺院の正福寺・如来寺・大正寺は、古屋の山沿いにそれぞれ境内地がありましたが、正福寺は文亀年間（1501～1504年）、如来寺は宝徳年間（1449～1452年）、大正寺は正保元（1644）年に、現在地に移転したと伝わります。境内地が隣接する3箇寺ですが、同地は剣丸尾第1溶岩の末端であり、「ツツミ」などの湧水が豊富で溶岩台地上は土石流などの災害に襲われる危険が少ないため、移転地に選ばれたと考えられます。



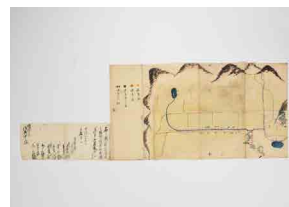
新田と上新田の水源
「甲斐国都留郡新倉村高反別
明細帳」
宝暦10（1760）年
館保管



上新田開発の記録
「甲斐国都留郡新倉村新屋敷
御水帳」
正徳2（1712）年
館保管



新田（新町）の地割と用水路
「瑞穂村之内新倉組二番字新
屋敷全図」
明治時代
館蔵



上新田と埋樋
「新倉村絵図」
明治3（1870）年
館保管

10 新倉掘抜の歴史①—江戸時代（17 世紀）—

江戸時代に富士吉田市内に水田があったのは、新倉村・下吉田村・^{おおあすみ}大明見村・^{こあすみ}小明見村・^{かみくれち}上暮地村ですが、全耕地に対する比率は他村が26～33%でしたが、新倉村は19%しかありませんでした。このことから、新倉村が水に苦勞してきたことが分かります。こうした逆境の中で、新倉村の人々は、剣丸尾第1溶岩の溶岩台地上に水を引いて水田にすることを熱望してきました。水源として期待されてきたのが、山を隔てた向こうにある河口湖でした。新倉からは直線距離で約2 km、山を迂回すると約4 kmありました。

河口湖の現在の水面標高は約833 m、新倉の標高は約827 mですので、水路を通せば標高が低い新倉に水を通すことは可能でした。しかし、地上は富士山の溶岩に覆われ、標高が途中で850 m以上と高くなっているため、地下を掘り抜く用水トンネルを造る必要がありました。

新倉掘抜を掘る最初の試みは、当地を支配していた領主が費用を負担し、新倉村の人々が中心となって、延宝8（1675）～元禄3（1690）年に行われたと伝わります。暗闇の中をロウソクと油で火を灯し、ツルハシ・クワ・ノミなどを使って手作業で掘っていきました。ただ、岩が柔らかいところを掘り進めたため、崩落が度重なり穴がすぐに埋まってしまうだけでなく、取水口と出口との高低差が少なく水がトンネルの途中で止まってしまうなどの問題を解決できず、失敗に終わります。

10 新倉掘抜の歴史②—江戸時代（19 世紀）—

次の試みは、約160年後の弘化4（1847）年に新倉掘抜の出口が再発見されたことがきっかけで始まります。今回は、新倉村の人々が資金の調達から工事の実施まで全てを自分たちで行いました。当初は、古い穴にたまった崩れた石を運び出し、修理をすれば使えるようになると思込んでいましたが、最終的には全体の半分を新たに掘ることになり、硬い岩のところは専門の石工を雇って工事を行いました。6年後の嘉永6（1853）年に完成し、通水に成功しますが、翌年に河口湖が大減水し、内部も再び崩落したため水が止まってしまいます。すぐに修理しようとはしますが、これまでの工事で新倉村だけでなく村民も多額の借金をしていたため、その返済にまず目途をつけることに苦しみます。9年後の文久2（1862）年、ようやく開発資金の確保ができ、3度目の工事を開始します。そして、3年後の慶応元（1865）年、遂に新倉掘抜が完成します。今回は河口湖の水位が下がっても水が流れるように床下げし、崩落したところも掘り直したため、通水に成功します。翌年には新倉掘抜出口から農地までの用水路を整備し、11ヘクタールの畑を水田に転換しました。このように3度目の正直で成功した新倉掘抜工事のうち最後の2回の工費は約7,300両、のべ作業員数は10万7千人にもなりました。新倉掘抜のトンネル部分の距離は約3,700 m、取水口と出口との高低差は約10 m、トンネル内の高さは約1.67 m、底面の幅は約1.12 mです。

新倉掘抜の完成図

「新倉掘抜絵図」
慶応元（1865）年
館蔵



新倉掘抜と水田を結ぶ水路

「新規水路井水配先絵図」
慶応2（1866）年
館蔵



新倉掘抜と水田開発

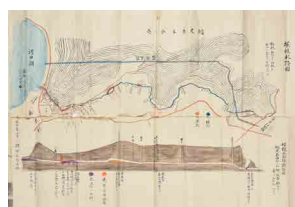
「新倉掘抜畑田成絵図」
江戸時代末～明治初め
館蔵



10 新倉掘抜の歴史③—明治～大正時代（20 世紀）—

新倉掘抜完成から約 40 年後の明治 37（1904）年、40（1907）年に河口湖の大増水で湖畔の集落に浸水被害が出ます。排水路としての役割も期待されていた新倉掘抜ですが、掘った土を地上に出す排出口を設けるため^{うそぶき}嘯山の下ではなく、嘯山と平地の境目を掘ったため、屈曲が多く距離も長く、内部の高低差も多いなど排水に適さない構造でした。そのため、河口湖畔の人々は、河口湖の水を排水するために山梨県へ新排水路（以下、県庁隧道）を造るよう要望を出し、明治 40 年（1907）には河口湖治水組合を設立します。要望を受けた県は、直線で県庁隧道を造ることを計画し、明治 41（1908）年に 7 月 10 日着工します。明治 42（1909）年 3 月竣工の計画でしたが、期限内に終わることが難しく、工期は幾度も延期されます。明治 43（1910）、河口湖が大増水したため、瑞穂村（新倉・下吉田）が急きょ新倉掘抜内部にたまった土石を除去する改修工事を行いますが、河口湖の水位を下げることはできませんでした。

明治 45（1912）年、県庁隧道工事に桂川電力株式会社（現、東京電力）所有の電動の削岩機を借用して運用すると 1 日あたり 30～60cm しか進まなかったのが、90cm 以上掘り進むようになります。そして、同年 12 月 1 日に県庁隧道が貫通し、大正 2（1913）年 6 月 13 日に通水に成功します。工期は約 5 年で、長さはトンネル部分（第一隧道と第二隧道）は約 1,630m、地上部分が約 1,040m になります。



新倉掘抜と県庁隧道①「祝詞
「掘抜水路図・掘抜水路縦断面
面図」
大正 3（1914）年
館蔵



新倉掘抜と県庁隧道②
「疏水隧道平面図」
『新倉用水旧隧道及河口湖排
水隧道調査報告書』
大正 3（1914）年／館蔵

10 新倉掘抜の歴史④—明治～平成時代（20 世紀）—

桂川水系で水力発電を行う桂川電力株式会社（現、東京電力）は、明治 40（1907）年に河口湖と西湖の水を用水トンネルで桂川に放水し、下流にある鹿留（^{ししどめ}都留市）の水力発電所に導水することを計画します。明治 43（1910）年から河口湖治水組合や瑞穂村との交渉を進め、大正 5（1916）年に着工し、大正 7（1918）年 2 月 1 日に通水します。完成した用水トンネル「桂電隧道」は通称「桂電川」といい、現在は「鹿留発電所^{うそぶき}水路」と称します。この水の利用について、新倉村が持つ新倉掘抜による水利権を受け継いだ瑞穂村は、桂川電力株式会社と協定を締結し、瑞穂村が^{うそぶき}水路の水を農業用水・水道水として使用することを認められます。瑞穂村は、この水利権に基づき、昭和 10（1935）から河口湖を水源とする上水道施設を現在の下吉田浄水場（赤坂児童公園〔水公園〕）に整備するとともに、瑞穂村内の水道管敷設工事を進め、昭和 11（1936）年に供用を開始します。第 2 次世界大戦後、軍用機を生産していた武蔵航空株式会社吉田工場の跡地（現、竜ヶ丘）の溶岩台地上を水田にするため、県庁隧道の水を引くことが決まります。昭和 23（1958）年に通水が始まり、溶岩台地に土を入れ整地をしながら水田を広げていきました。昭和 32（1957）年には、県庁隧道の水を引いて、旭町と浅間町の山すそで水田を始めます。平成 6（1994）年には、河口湖の増水被害を防ぐために、山梨県が^{うそぶき}嘯放水路を完成させました。

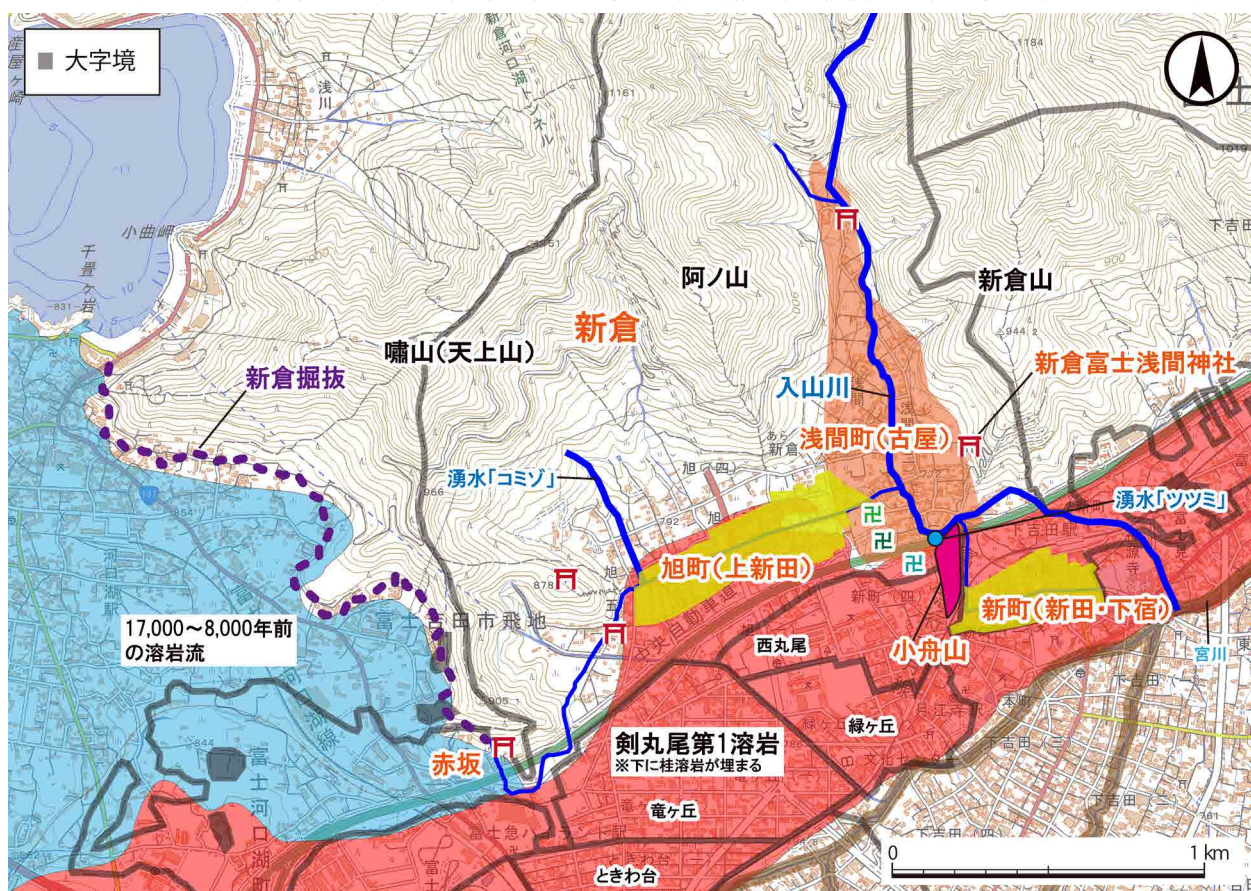


鹿留発電所^{うそぶき}水路
「山梨県南都留郡下吉田町」
昭和 14～26（1939～51）
年
館保管

新倉の概要

新倉は、富士吉田市の西部に位置し、市街地は標高 740 ～ 850m に広がります。南西は富士河口湖町船津と接し、西から北西は尾根を境として同町浅川と河口に接し、東は下吉田と接し、南は剣丸尾第 1 溶岩を境とします。北と東西を囲む山は、西から東に 嘯山（天上山）、阿ノ山、新倉山といえます。阿ノ山と新倉山の間には入山川が流れ、小扇状地を形成しています。南側は平地が広がり、富士山を一望することができます。平地は富士山の溶岩と雪代（土石流）が形成したのですが、前述した小扇状地をさえぎるように南北幅 1 km、厚さ 6 m ほどの剣丸尾第 1 溶岩が覆っています。剣丸尾第 1 溶岩は約 1,000 年前に流下した溶岩で、さらに下には約 9,000 年前に流下した桂溶岩が埋まっています。それぞれの溶岩が流れた後には、入山川が出口を失い、堰止湖が形成されていたと考えられています。入山川と剣丸尾第 1 溶岩がぶつかる場所の南には小舟山がありましたが、昭和 44（1969）年に開通した中央高速道路により削られたため、現在はありません。

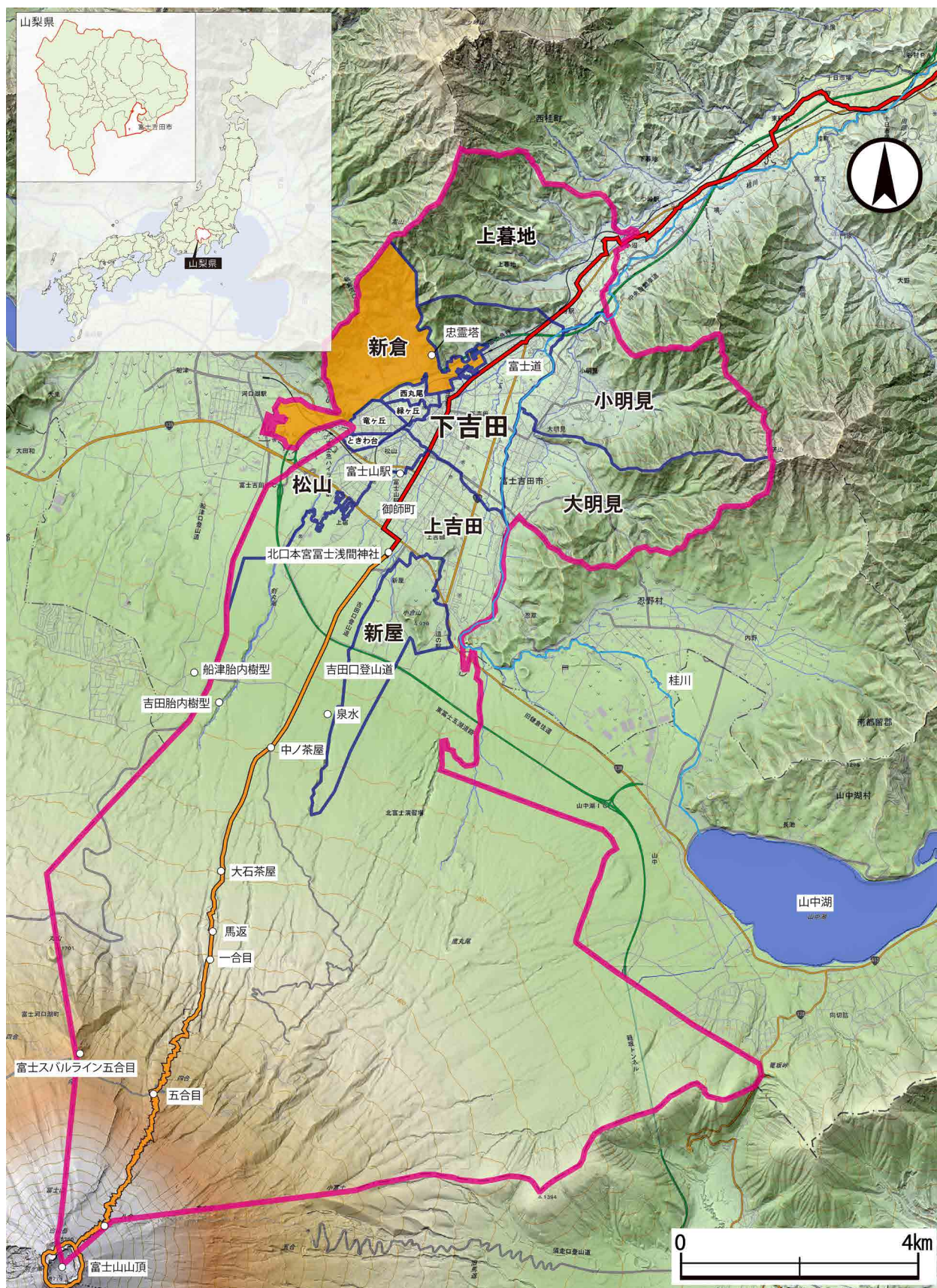
新倉は、大きく浅間町・新町・旭町（赤坂を含む）の 3 地区で構成されます。中世から集落がある浅間町は古屋、江戸時代に溶岩台地を開発した新町と旭町はそれぞれ新田（または下宿）・上新田と昔は呼ばれました。浅間町は入山川や多数の湧水があるなど水に恵まれた地区です。それに対して、新町や旭町は溶岩台地上のため、屋敷と田畑を造る新田開発の時は、溶岩に土を盛って整地し、湧水から水を引くなど苦労を重ねてきました。さらに新倉の人々は、溶岩上の畑を水田にするために河口湖から水を引く総延長約 3,700m の用水トンネル「新倉掘抜」を完成させます。行政区域は、江戸時代までは新倉村でしたが、明治 8（1875）年に下吉田村と合併して瑞穂村になり、昭和 14（1939）年に町制施行して下吉田町になりました。そして、昭和 26（1951）年に富士上吉田町・明見町と合併して富士吉田市となります。



新倉周辺の地図

※国土地理院の「地理院タイル」を加工して作成

<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>



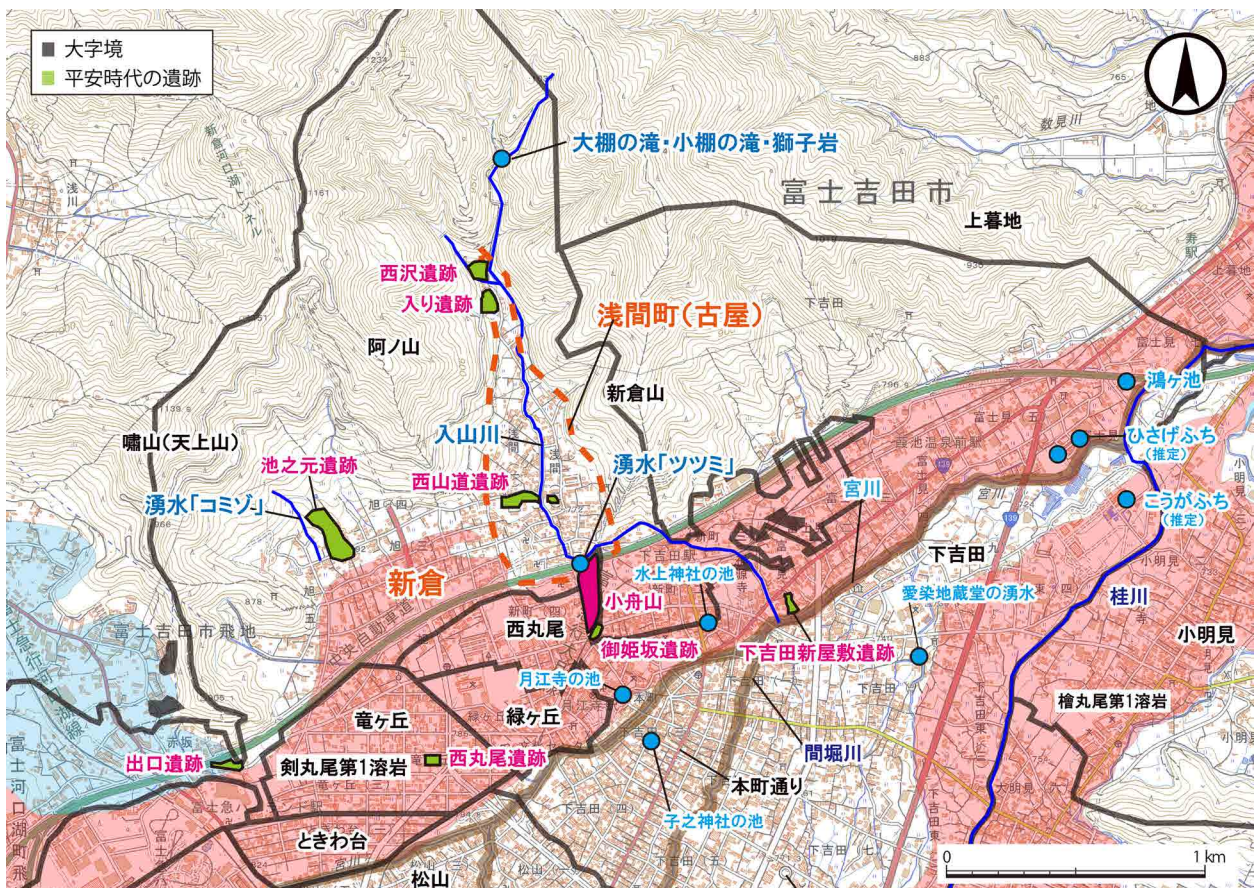
富士吉田市域全体図

※カシミール 3D スーパー地形セットにより作成



新倉の縄文時代の遺跡

※国土地理院地図の立体地図を加工して作成 <https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>



新倉周辺の川と湧水

※国土地理院の「地理院タイル」を加工して作成 <https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>



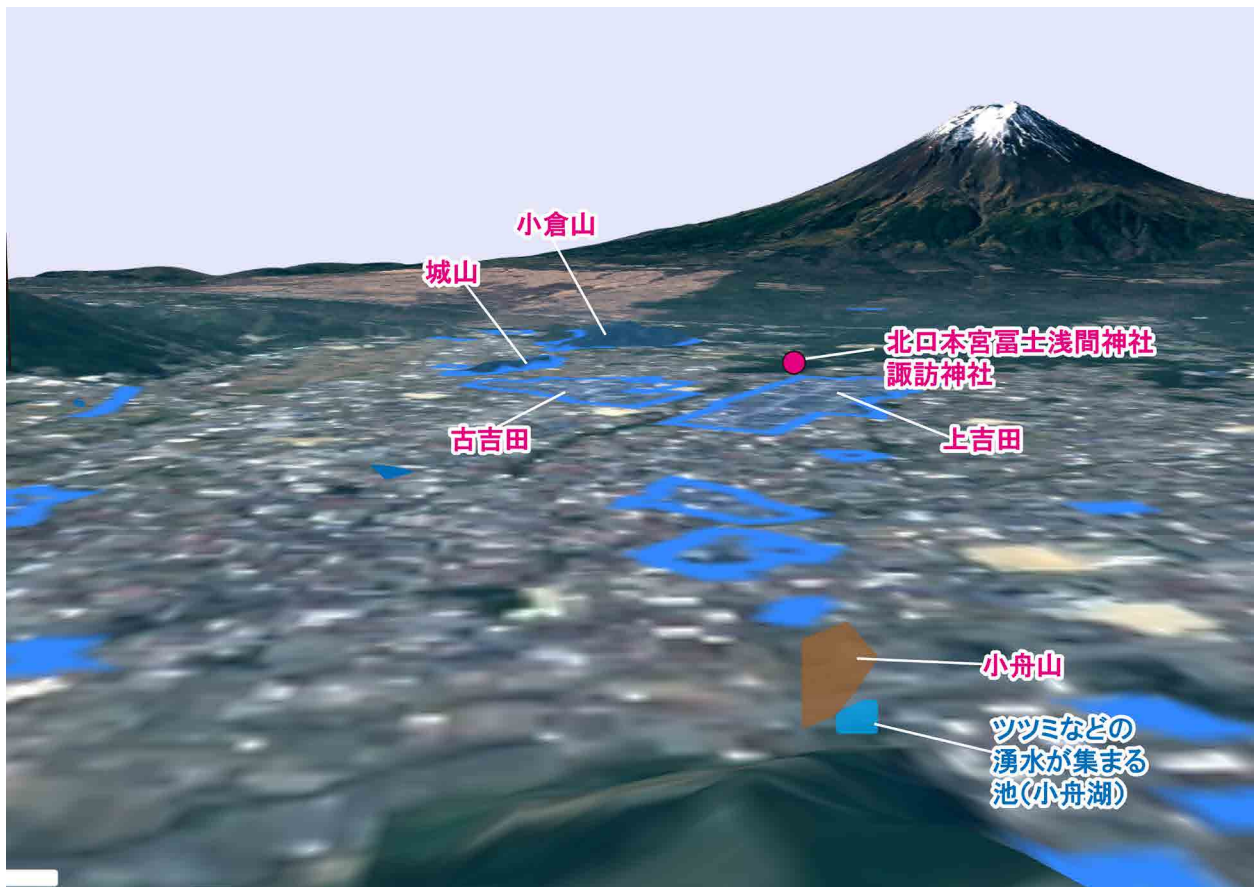
新倉と河口・浅川の山と道

※国土地理院地図の立体地図を加工して作成 <https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>



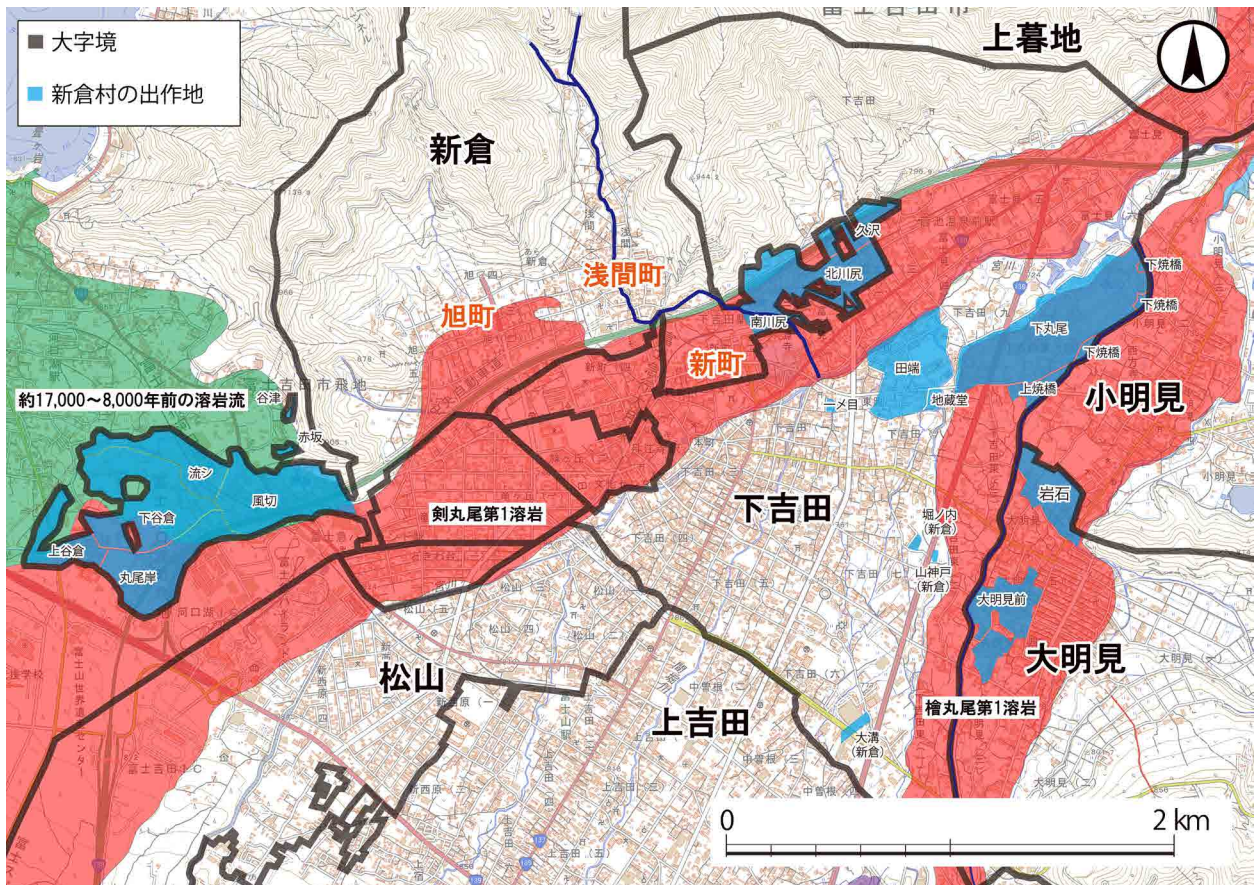
新倉と城山

※国土地理院地図の立体地図を加工して作成 <https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>



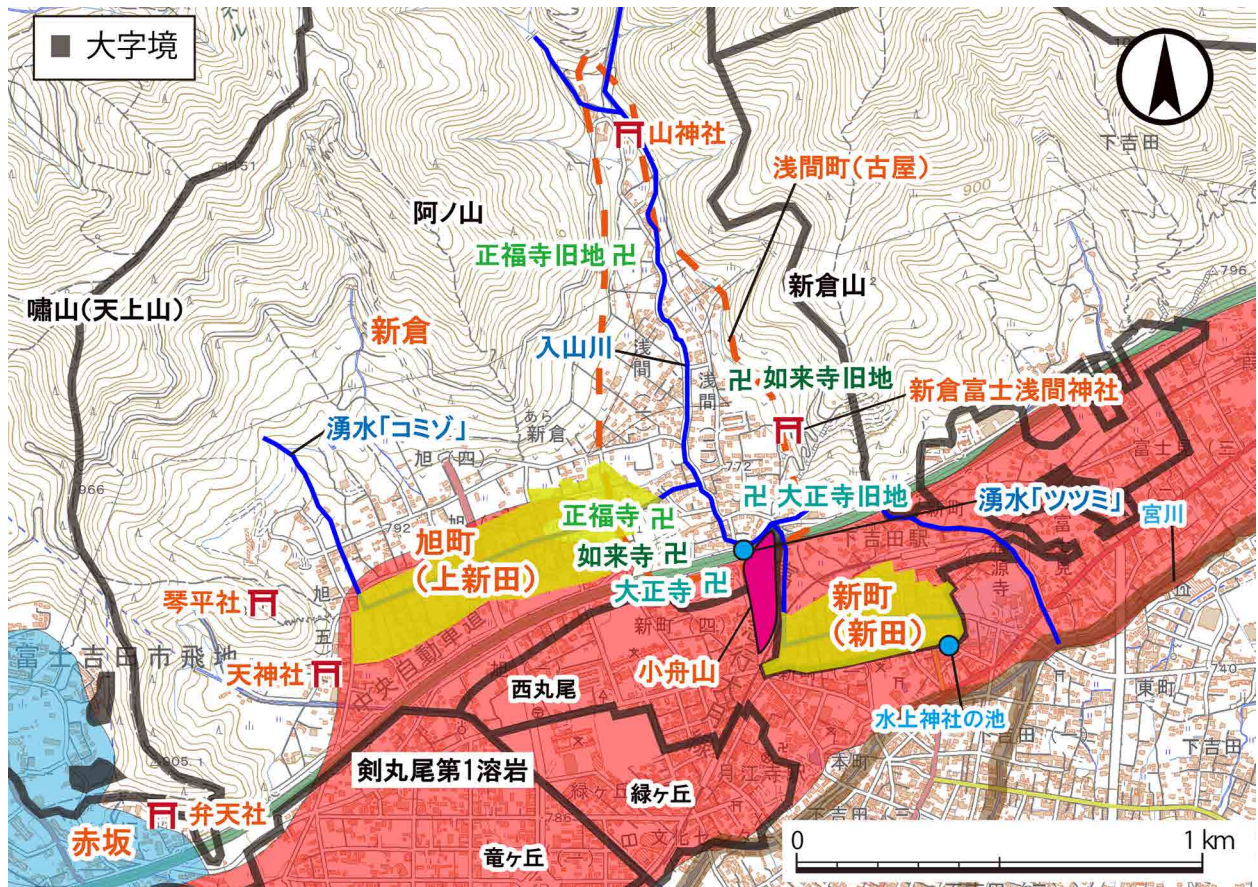
新倉から望む上吉田

※国土地理院地図の立体地図を加工して作成 <https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>



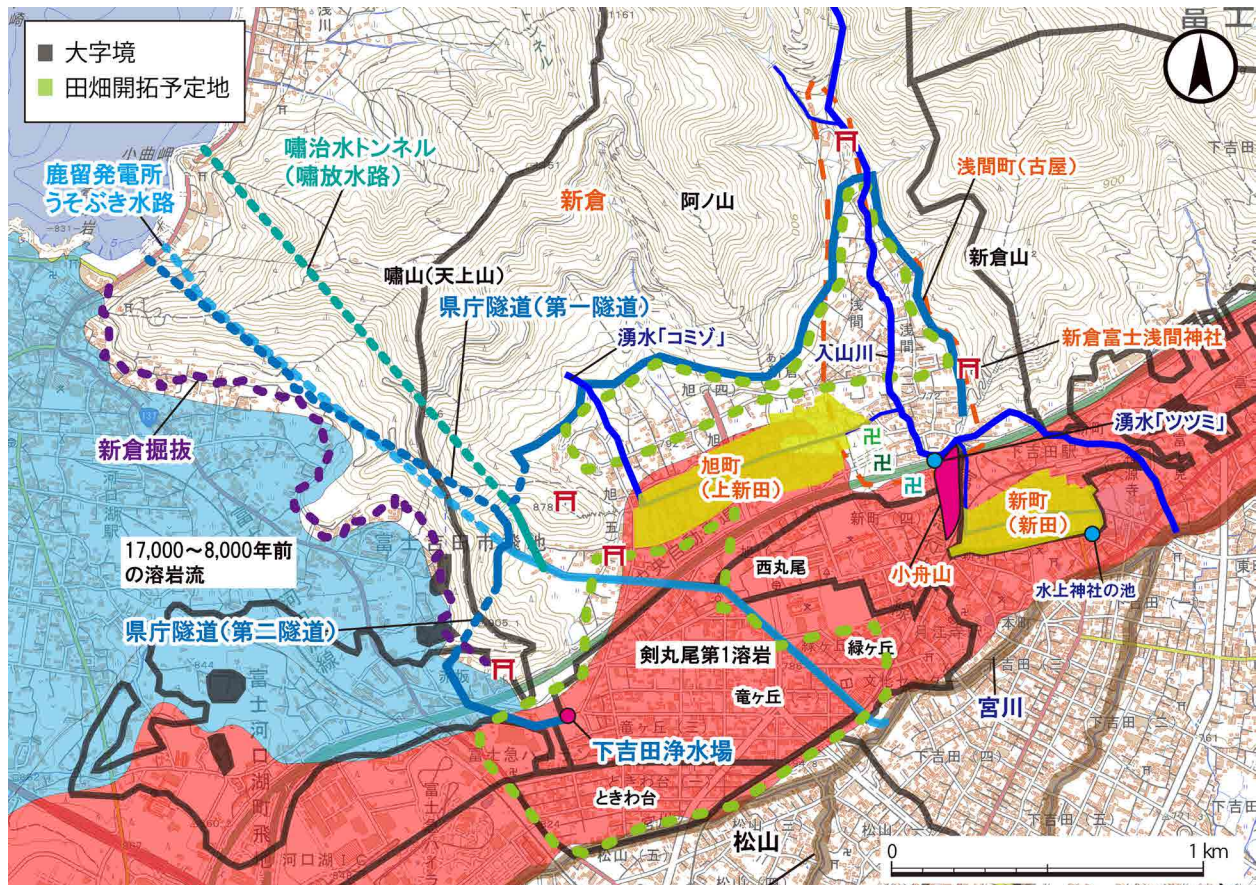
新倉村の出作地

※国土地理院の「地理院タイル」を加工して作成 <https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>



新町と上新田

※国土地理院の「地理院タイル」を加工して作成 <https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>



県庁隧道などの経路

※国土地理院の「地理院タイル」を加工して作成 <https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>

資料提供者

企画展開催にあたって次の方々に多大なご協力をいただきました。
厚く御礼申し上げます。

正福寺 株式会社 CATV 富士五湖

参考文献

- 『甲斐国志』（文化 11（1814）年編さん）
『甲斐国 社記・寺記』（明治元（1868）年編さん）
浅間町自治会文化部 1977『浅間町の民話』
萱沼英雄 1966『富士北麓開拓史 新倉掘抜』
産業技術総合研究所地質調査総合センター 2016『富士火山地質図（第2版） 地質図・説明書』
篠原武 2017「富士山信仰の遺跡―富士山北麓」『静岡県考古学会 2016 年度シンポジウム 富士山信仰への複合的アプローチ』
篠原武 2020「小字で紐解く富士吉田の歴史」『地図中心』575
下吉田町連合青年会 1947「郷土調査集成」『富士吉田市史 民俗編』第1巻
富士河口湖町教育委員会 2015『富士河口湖町埋蔵文化財調査報告書第1集 鯉ノ水遺跡』
富士山考古学研究会 2020『富士山噴火の考古学 火山と人類の共生史』吉川弘文館
ふじさんミュージアム 2016『ふじさんミュージアム企画展 縄文人が目撃した富士山噴火―約五千～四千五百年前の火山災害と復興への歩み―』
富士吉田市教育委員会歴史文化課 2005『富士吉田市文化財調査報告書第5集 国記録選択無形民俗文化財調査報告書 吉田の火祭』
富士吉田市史編さん室 1979『富士吉田市史 行政編 上』
富士吉田市史編さん室 1987『市史民俗調査報告書第6集 新倉の民俗―富士吉田市新倉―』
富士吉田市史編さん室 1988『富士吉田市史資料叢書 4 村明細帳』
富士吉田市史編さん室 1989『富士吉田市史資料叢書 6 検地帳』
富士吉田市史編さん室 1997『富士吉田市史資料叢書 14 池之元遺跡発掘調査報告書』
富士吉田市史編さん室 1998『富士吉田市史 史料編』第1巻 自然・考古
富士吉田市史編さん室 1992『富士吉田市史 史料編』第2巻 古代・中世
富士吉田市史編さん委員会 1994『富士吉田市史 史料編』第3巻 近世Ⅰ
富士吉田市史編さん委員会 1994『富士吉田市史 史料編』第4巻 近世Ⅱ
富士吉田市史編さん委員会 1993『富士吉田市史 史料編』第6巻 近・現代
富士吉田市史編さん委員会 1995『富士吉田市史 史料編』第7巻 近・現代
富士吉田市史編さん委員会 1996『富士吉田市史 民俗編』第1巻・第2巻
富士吉田市史編さん委員会 2000『富士吉田市史 通史編』第1巻 原始・古代・中世
富士吉田市史編さん委員会 2001『富士吉田市史 通史編』第2巻 近世
富士吉田市史編さん委員会 1999『富士吉田市史 通史編』第3巻 近・現代
富士吉田市文化財審議会 1970『富士吉田の文化財（その2）史蹟 新倉ほりぬき』
富士吉田市文化財審議会 1977『富士吉田の文化財（その7）民話』
富士吉田市文化財審議会 1977『富士吉田の文化財（その8）続民話』
富士吉田市文化財審議会 1981『富士吉田の文化財（その14）民話と伝説』
奈良文化財研究所 2016『北口本宮富士浅間神社建造物総合調査報告書』
丸島和洋 2013『中世武士選書第19巻 郡内小山田氏 武田二十四将の系譜』戎光祥出版
山梨県土木部・都留土木事務所 1995『河口湖嘯放水路工事誌』
山梨県立富士山世界遺産センター 2020『令和2年度第1回企画展 富士山と鎌倉道―御山の入口・新倉―』
山梨県南都留郡連合教育会編 1938『南都留郡郷土誌』
渡邊保 1987『郡内電力史「灯」』